

公衆衛生 書評

「国際保健政策からみた中国—政策実施の現場から」(九州大学出版会)

評者 相田 潤 東北大学大学院歯学研究科国際歯科保健学分野

経済発展が目覚ましい隣国、中国における保健医療の現状と、そこで活動が続ける WHO 西太平洋地域事務局を中心とした保健機関の活動が、筆者の幅広い国際機関での活動経験を通して語られる。本書の良いところは、貴重な保健医療関連のデータや、臨場感あふれる国際機関の現場の描写だけではなく、公衆衛生を学ばせてくれるところにもあろう。

中国では、都市部と農村部の経済格差は拡大が続いている。都市で子どもの肥満や栄養過剰が見られる一方で、農村では慢性栄養不良と低体重が問題となる。格差の拡大は、農村から仕事を求めて都市へ移動する国内移民労働者を生み出す。この2億人にも上る流動人口は、農村で生まれたために「都市籍」を持たず、医療や教育を含むあらゆる社会保障を受けることができない。さらに、グローバル化による社会の変化が追い討ちをかけている。今や中国の死亡原因は心疾患・がんをはじめとした慢性疾患によるものが大部分を占めるという。貧困と結びつく結核、流動人口の移動とともに伝播するエイズ、都市部を中心に増加する生活習慣病と、こうした現状は公衆衛生の歴史を再現しているように映る。

産業革命時の英国では、工場での労働が可能となった都市部に人口の流入が生じ、経済格差が拡大し、貧困層から結核などの疾病が発生することが多かった。これを都市構造、社会そのものの病として対策を考えることから、公衆衛生が発展した。現在では非感染症においても、健康の社会的決定要因が注目されている。中国では、まさに社会構造が病を生み出している状況がわかりやすい。

大谷順子著：国際保健政策からみた中国—政策実施の現場から。九州大学出版会 (TEL 092-641-0515)、1,200 円＋税



本書の第一部では概観として、経済成長と格差の問題や、人口爆発を押さえこむ中国の人口学的特徴について述べている。第二部では各論として SARS などの感染症、地域や生活水準により様々な特徴を示す生活習慣病、特徴的な自殺と精神保健、死因の高位をしめる傷害、水や空気に関する環境の各章から成る。特に SARS の記載は国際機関の活動の内幕まで詳しく書かれている。当初は及び腰だった中国政府が国際機関と協力しながら保健衛生システムを構築していく様子は、経済上の思惑があったとはいえ、国際保健政策の上で希望を抱くものであろう。第三部では、都市部と農村部で異なる保健医療制度の紹介と、中国に関係する国際機関について紹介されている。アルマ・アタ宣言でプライマリヘルスケアのモデルにしていた農村部の保健医療システムが、社会構造の変化に伴い崩壊していった状況や、WTO への加盟により生じうる変化についても触れられている。

WHO での活躍だけでなく、日本人初の保健専門家として世界銀行に入学し、また米国の CDC や日本の結核研究所での経験も持つ筆者ならではの視点は、幅広い人々への示唆に富むものであろう。また、国際保健に携わる専門家の方々のコラムも充実しており、興味深い。中国について深く知ると同時に、国際保健と公衆衛生について目を開かせてくれる一冊である。